

北海道東部の「矢柄研磨器」について

澤 四郎^{*}・三門 準^{**}

On the Arrowshaft Smoother in Eastern Hokkaido

Shirô Sawa^{*}・Jun Mikado^{**}

1. はじめに

先史時代の日本列島には、隣接の旧大陸から渡来した文物が少なくない。1964年に山内清男博士により、初めてその存在を指摘されたいわゆる「矢柄研磨器」もその一つであろう(山内1964a.b)。博士は、「Arrowshaft Smmoother また Arrowshaft Rubber, Poliser, Grinder 等」と呼ばれる道具のヨーロッパ、北アフリカ、シベリア、蒙古及び付近、沿海州、北朝鮮、北アメリカの出土例をもとに、国内資料の幾つかが、縄文時代草創期か、それに近い時期に属するのに注目し、「矢柄研磨器」の旧大陸に出現する上限年代から類推して、縄文時代の初現を、西紀前2500年とする衝撃的な実年代を提唱された(山内1967a.b, 1968, 1969a.b)。

事の当否はともかく、博士のこの試みは、地理的に離れた日本列島と旧大陸の先史時代の文物を対比し、相互年代を決定し、そこで得られた実年から、日本の先史時代を世界史の枠組みの中で捉えようとするもので、学史上、画期的な事件と言えよう。

しかし、山内博士がこれら一連の論文を発表された時点から現在に至るまで、この試みを評価する研究者は必ずしも多くない。その一つには、「矢柄研磨器」という欧米の用語に対応させた訳語に対する抵抗があらうかと思われる。つまり、博士が取り扱われた資料が、本当に矢柄の研磨を対象とするという特定の機能を主張し得る道具であるかどうかという面での妥当性について、時確な答えがなされなかったからである。もう一つは、「矢柄研磨器」の旧大陸における出現年代から、戦後多くの研究者が新資料を加えて確立された縄文草創期の年代観に真っ向から反論し、数千年以上も開きのある2500年という新しい年代で押えようとした点にある。

これらのことから、博士の「矢柄研磨器」とそれにもとづく縄文時代の上限年代論は、大方の研究者から、黙殺、あるいは無視された。

そうした流れの中で、山内博士の意図した方向と相反する結果とはなったが、この問題に真正面から取り組まれた論文に小野田正樹氏(小野田1976)、宮下健司氏(宮下1978)らのものがある。また北東アジアの資料をもとに、「矢柄研磨器」を「単条有溝砥石」という概念で捉え、国内産の資料に新しい年代観を打ち出された加藤晋平氏の論文がある(加藤1980)。

だが、山内博士が一連の論文の中でふれられた東釧路貝塚をはじめとする北海道の「矢柄研磨器」に深く言及されたものはあまりないように思う。

本稿は、特に深刻な意図を持って草したものではない。北海道東部には、過去に引き合いに出されたように、「矢柄研磨器」の出土例が比較的多くみとめられるので、それらの幾つかを図示し、時代性及び機能的蓋然性にふれ、今後の研究の覚え書きとするものである。

ここで得られた論拠がただちに草創期の「矢柄研磨器」に適用できるとは言い切れないが、その示唆するところは少しあらうかと思われる。

今回、ここで取り上げる「矢柄研磨器」の形態的特徴は、基本的には山内博士が述べられているように、平面形が卵形ないしは四角形で、断面は四角形か半円形を、溝が長軸に沿ってまっすぐに通るものである。溝の断面は半円形で、溝のある面は平になっている。それ以外のものは有溝砥石として扱っている。

2. 縄文時代各期の「矢柄研磨器」

道東地方の「矢柄研磨器」の出土例は、未報告例を加えると100点は越えるように思われるが、正確な数字は押えていない(註1)。素材となった原石の石質は、「屈斜路軽石流堆積物」産の石英安山質軽石と「摩周軽石流」産の輝石安山岩質軽石の二通りがあるようである(註2)。早期の出土例は、前者に限られる。前期以降は、両者が使用されるが、噴出年代の差を反映するものだらう(註3)。両者の使用割合は後者の方が多いようにみら

^{*} 釧路市立博物館 (Kushiro City Museum, Kushiro, Hokkaido)
^{**} 財団法人国際学友会 (KOKUSAI GAKUYUKAI, Tokyo)

れるが、後日の吟味が必要である。本州の草創期の「矢柄研磨器」が砂岩製であるのに対し、この時代の石質がすべて軽石製であるのが非常に特徴的であるといえる。

(1) 縄文早期の出土例

道東の早期の「矢柄研磨器」は、東釧路遺跡第Ⅱ地点の例が知られている（澤1968a, 岩崎・畑ほか1980）。1966年の調査で出土した1点であるが、いうまでもなく「屈斜路軽石流堆積物」産の白っぽい軽石を素材としている。一端が欠損した長さ6.5cm、幅3.4cmの小型品である（第1図1, PL 1）。平らによく擦られた両面には、それぞれ一条の溝が走り、一方の溝の断面は半円形を呈し、溝の直径は0.9cmである（註4）。他方の断面はV字形である。旧大陸に原郷土を有する石刃鏃石器群と共に出土している。土器は道東の縄文早期後半に編年される浦幌式である。かつて山内博士が「最近下層の絡条体圧痕ある土器の層からも、矢柄研磨器が出土した」と述べられているのは本例を指したものである（山内1968）。本例と石質を同じくし、形状、法量もそれに近い値を示す類似類は、標茶町二ツ山遺跡第Ⅱ地点から出土している。断面は半円状を呈し、長さ5.5cm、幅3.6cm、厚さ2.2cmを測る。長軸に沿う溝の幅は0.6cmである。これは、平面に十字にクロスする溝が付されいてる。断面も半円やU字状でなく、角ばっているので別物かも知れない。が、本例と同様、石刃鏃石器群一員として出土している。女満別式押型文土器と条痕文土器に伴出して（澤1968b）。新釧路市史では「矢柄研磨器」と見做しふれたことがある（岡崎・澤1974）。山内博士は、常呂町朝日トコロ貝塚の石刃鏃に伴う有溝砥石に言及されているが、不定形の砂岩製であり、博士も「標準的な矢柄研磨器とは決定出来ない」と言われるように、本稿の対象外であろう（山内1968）。

いずれにせよ、北海道における早期の「矢柄研磨器」は、件数こそ少ないが、これまでのところ、道東に濃密に分布する石刃鏃文化の石器群中に限られているようである。これらの石器群は、住居の形態も含めて、近接のアムール流域の初期新石器ノヴォトロフカ遺跡の様相と一致する点が多いだけに注目されよう（加藤1979）。また、今のところ、前後する数型式以上に及ぶ早期の平底の土器群には伴出しないことも、注意する必要がある。

(2) 縄文前期の出土例

「矢柄研磨器」が次に現われるのは、押型文尖底土器の時期で、東釧路V式土器とその仲間に伴う例である。この土器は、十勝、釧路、根室を中心に網走、斜里に分布を示す土器である。南千島にも出土例が知られている（澤1958）。この土器に伴う釧路での出土例は多い。素材の石質は「摩周軽石流」の産物である軽石が多いが「屈斜路軽石流堆積物」産の軽石を使うものもある。

先ず、1958年の東釧路貝塚の道路工事に伴う調査で（1958b）6点が出土している（註5）。また、同遺跡の1960年の調査で2点出土している。この内の1点が図示して報告した例である（河野・澤ほか1962）。さらに1965年の二次に及ぶ調査と1966年の調査ではもっと多い数を記録しているが、資料未整理の状態にあり、正確な数は押えていない。山内博士が図示したのは、1965年第二次調査の1例である（岩崎・宇田川ほか1966、山内1968）。さらにここでは1967年の調査でも1点出土している。砥石として報告されている（釧路考古学研究会1968）。

1977年の東釧路貝塚に隣接する東釧路等Ⅲ遺跡の発掘では、発掘区の全域から総数37点が出土している（澤・西ほか1978）。「矢柄研磨器」が報告された遺跡としては、道東で最も多く出土した例であろう。

その中で注目すべきこととして、第1号址中の出土事例が挙げられる。床面直上から同一石材で作られた二個の「矢柄研磨器」が溝を内側にし、ほぼ重なるように出土したのである。石質は「摩周軽石流」産の輝石安山岩質軽石で第1図3は長さ19.2cm、溝径0.9cmを測り、第2図2は表面の鉾物の剝離がひどく、正確な溝径の計測はむずかしいが、長さ17.8cmを測る。重ね合わせると厚さ9cmほどになる（PL.3右2点.6）。なお、いずれも先端部などがかなり欠損しており、元は、おそらく20cmほどの長さの溝を有したろうと思われる。周辺部には石斧や黒曜石のチップのブロックなどがあった（PL.2）。この住居址は前期の釧路V式土器の時期のもので、これらの遺物群も同時期とみられる。

そのほかの「矢柄研磨器」は遺構中から18例、遺物包含層中から19例出土しており、そのほとんどが縄文時代前期のものと思われる（第3図）。この東釧路第Ⅲ遺跡からは数多くの墓墳が検出されたが、「矢柄研磨器」が出土した遺構は、住居址が2例、性格不明の土壌が10例、墓墳が1例であった。

前期では以上のほかに、屈斜路コタン遺跡の押型尖底土器に伴出した例が未製品を含め7点知られている

(澤・永田ほか1978)。前期の東釧路V式に前後する二、三の型式の土器の伴出例は知られていず、奇妙であるが、それには何か別な要因が秘められているのであろう。

(3) 縄文中・後期の出土例

山内博士により「矢柄研磨器」が論じられていた頃、道東における中期の出土例は皆無であった。その後1例が追加されている。標茶町茅沼遺跡の例がそれである(豊原・福士ほか1980)。報告書の記載では石質は火山弾と記されているが、豊原照司氏の談によれば、石英安山岩質軽石という。幅7cm、長さ9cm、厚さ3cmの軽石の一方の平坦面中央に幅1.0cmの断面U字状の溝が観察できる。土器は釧路でいう北筒II式で、東大のトコロ6類の仲間である。同氏は、釧路町細岡貝塚西端の道路カッティングで、同様中期の「矢柄研磨器」を1例採集し、所持されている(註6)。同時期の類品に、標茶町開運町遺跡出土品がある(豊原・福士ほか1983)。断面三角形を呈する長さ7cm、幅4.4cmの砂岩の平坦面長軸中央に幅1.0cmのU字状の溝がみられる例で、「矢柄研磨器」と記載し報告されている。釧路でいう北筒式II式、同III式土器とともに出土している。報告書ではトコロ6類、同5類、羅臼式の三型式が出土し、いずれに伴ったかは不明とされている。石質の違いはあるものの、溝の断面形態、溝幅の計測値が茅沼遺跡と一致している点に興味を持てる。

後期の条件にかなった例はない。強いてあげれば、斜里町オクシベツ川遺跡の1例がある(金盛・小林ほか1980)。表土出土品なので、時期は明確でないが、後期後半から終末にかけてのものらしい。長さ7cm、幅5～6cm、厚さ5cmの流紋岩質軽石の片面に一条の幅1.1cmのU字状崩れの溝がみられる。報告書では「すり石」と記載されている。

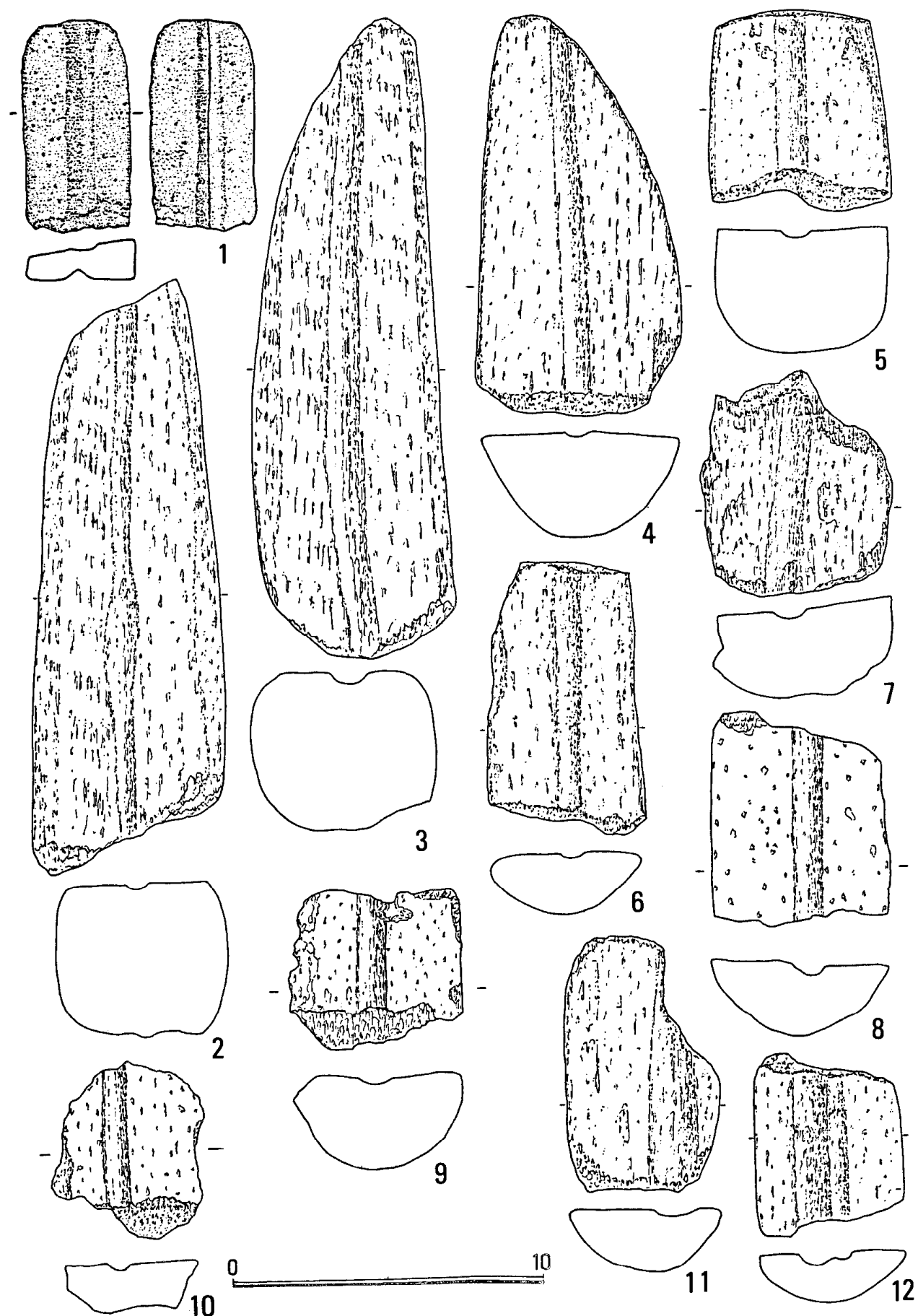
(4) 縄文晩期の出土例

晩期の「矢柄研磨器」の出土例は、縄文前期に次いで多い。道東の発掘資料としては、1926年に清野謙次博士が発掘された釧路市緑ヶ岡遺跡の例が最初の例であろう(清野1927)。軽石製の「多分砥石の類」として3例の完形品を含めた6例が図示され、報告されている(清野1969)。内1例の破損品は、2条の溝を有するもので、本稿では有溝砥石の類だが、短時間による狭い範囲内の発掘品なので、一括資料の可能性が強い。

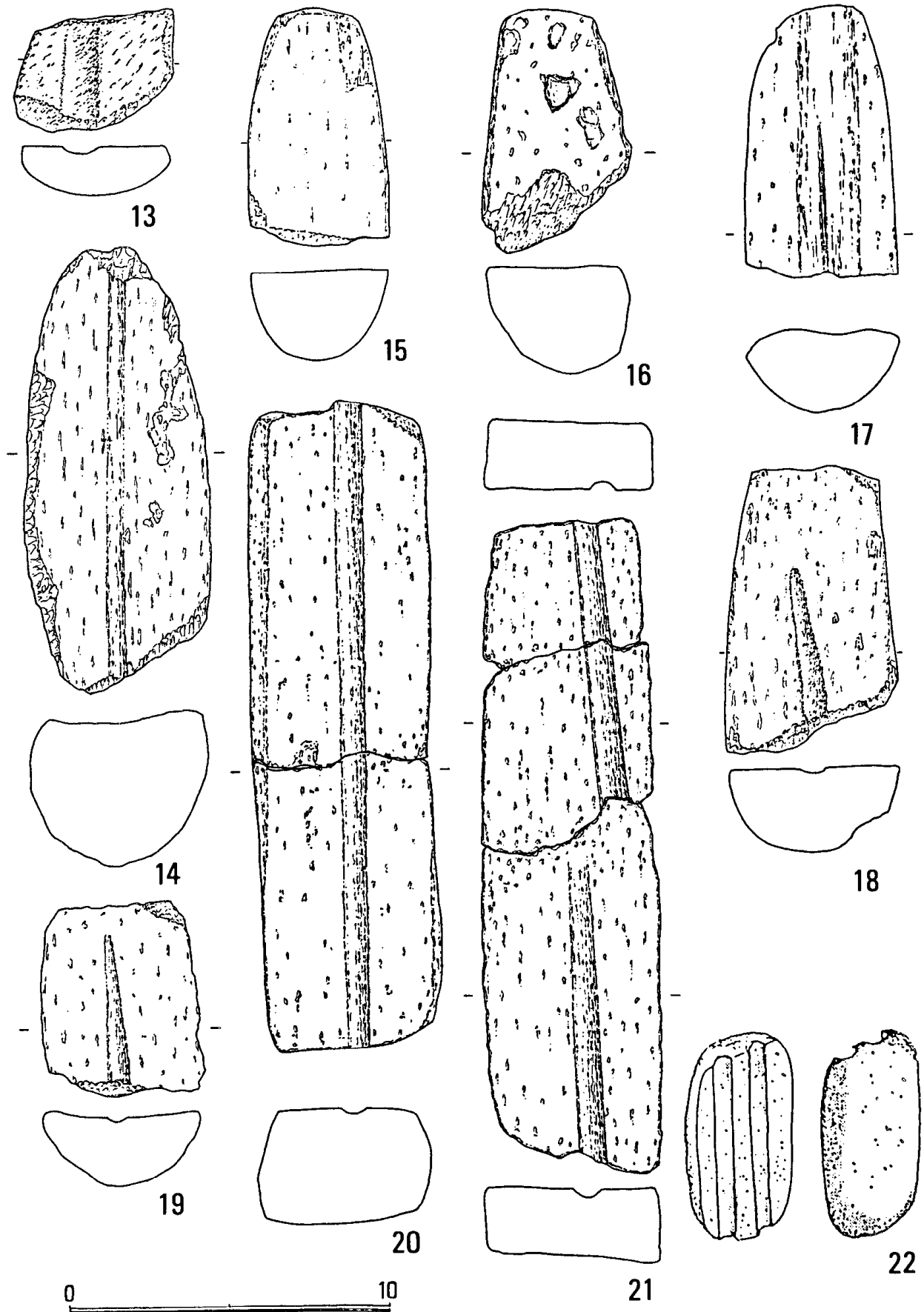
この釧路市緑ヶ岡遺跡は、1961年から1964年にかけて計5回に及ぶ発掘調査があり、晩期の墓墳が多数存在する遺跡であるのが判明したが、その後宅地造成で破壊さ

れ消滅した。各年次の調査で未製品を含む何点かの軽石を母材とする「矢柄研磨器」が出土している。だが、資料は未整理の状態にあるため、公表されていない。ただ、1963年の墓墳については、略報があり、副葬されていた「矢柄研磨器」の数だけは知ることができる(宇田川・澤1984)。有溝軽石と記録された例で、9点出土している。その内27号pitからは5点出土しており、注目される。山内博士が「河野本道氏の談によると、釧路地方の縄文晩期の墳墓からも、矢柄研磨器が出たという」と述べられたのは、この辺の情報に基づいている(山内1968)。これらの「矢柄研磨器」は、大方が幣舞式ないし緑ヶ岡式土器に伴出したとみられる例である。

晩期のセットになる好例を出土した遺跡としては、釧路市幣舞遺跡がある。この遺跡は1961年に小面積の発掘がおこなわれている。この際、破損品だが、「矢柄研磨器」1点が出した。その後、1968年夏の市道工事中に、頭位南東の座位屈葬の人骨を伴う墓墳が発見され、調査している。半分ほど破壊され、工事関係者により頭蓋骨および副葬品が取り上げられた後であったため、個々の遺物の正確な位置は不明である。墓墳内には、墳底から20cmの高さまで、ベニガラが充満していたのが窺えた。墓は径1.2cmほどで、円形を呈していた。大量の黒曜石の大形剥片、石鏃7点、「矢柄研磨器」2点、扁平に整形された大形軽石製品3点、磨製石斧4点、縄文の施文された型式的特徴の乏しい舟形小型土器1点などが副葬されていた(岡崎・澤1974)。第2図20と第2図21は長さ19.1cm、幅5cm、厚さ3.3cmで、全体が長方形に成形されており、断面は四角形である。両面ともよく擦られている。溝は浅いが直径1.0cmである。全面にベニガラが付着していた。中央部から折れているが、断面にベニガラの付着はないところをみると後で折れたらしい。第2図21は長さ19.2cm、幅5cm、厚さ2cmで三つに折れている。全面21同様よく擦り込み成形されている。この「矢柄研磨器」は途中で切れてつながらない溝をもっているが、両方の溝とも一方が浅く、一方が深くなっている。しかし先細りではなく、溝幅は一定で、直径値は0.8cmを測る。三つに折れているが、二つの溝とも中ほどの折れ目、即ち割れ目で途切れること、溝の傾きと溝径が同じであることなどから、PL8のように二つ重ね合わせることで、機能したと考えられる。この場合、溝は互いに補って完全な円孔をつくるが、合せ目は、機能強化を計るため、若干の隙間があった方が効果的かも知れない。溝が先細りするとされる例には、案外本例のような使用方法がとられたのかも知れない。ベニガラの付着は三つの折れ目にみられるが、これは、副葬に際し、

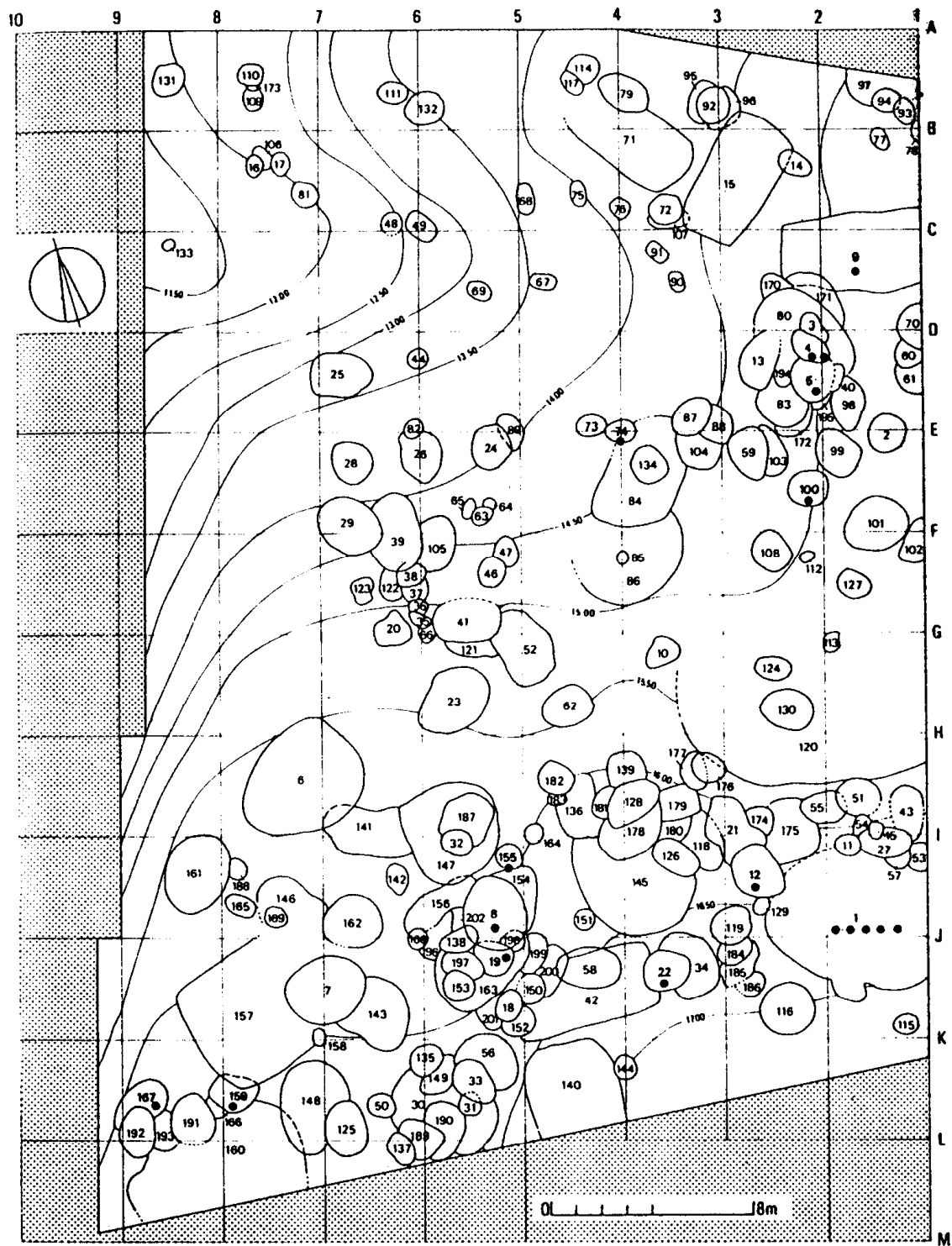


第1図 北海道東部の「矢柄研磨器」1、東釧路遺跡第II地点、2～12、東釧路第3遺跡。



第2図 北海道東部の「矢柄研磨器」と石洗いの石

13～19、東釧路第3遺跡、20・21、幣舞遺跡、22、石洗いの石



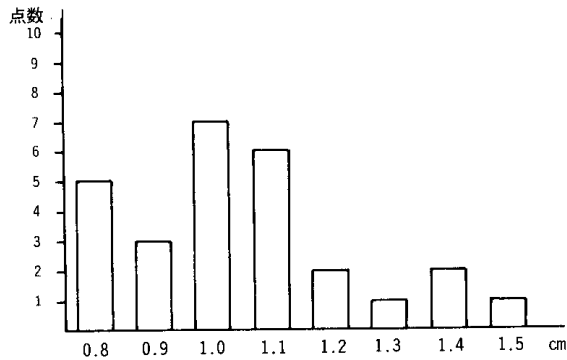
第3図 東釧路第3遺跡の「矢柄研磨器」出土分布図

・は「矢柄研磨器」の出土地点。

対をなす一方が、故意に折った可能性もある。こうした例は、近世アイヌの風習によくある例である。また、副葬品として石鏃が出土しているが、これと「矢柄研磨器」との関連も考えられ面白い。これに似たケースは、緑ヶ岡遺跡の1963年22pitにもみられる。

道東の晩期の出土例はほかにもある。斜里町ウナベツ遺跡出土例である（中田・金盛ほか1977）。それらしいものも含めると9点ほどになる。ウナベツⅢ式土器に伴出したものであるが、この土器は2、3の型式を含んでいるようであり、そのいずれかが特定できない。報告書で

表 1. 東釧路第3遺跡出土品(溝の直径値)



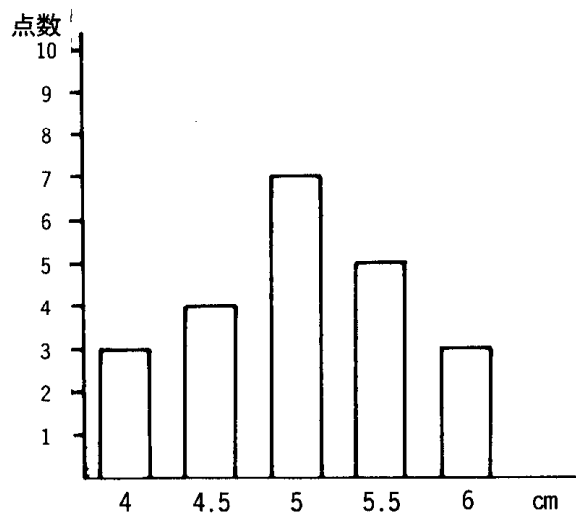
は軽石製の溝状砥石と呼んでいる。溝幅は1.0cmに集中するようであるが、実物を見ないと分らない。これよりも形の整った例として標津町伊茶仁チャシ第1遺跡の出土例がある(梶田1982)。一端が欠損した3点が図示されているが、「矢柄研磨器」として記載し、いずれも長軸中央に浅い溝を持つとされている。図では溝幅1.0cmが1例と0.6~0.7cmほどの2条の溝を持つものがあるが、他の1例については詳かでない。形態は、釧路市の晩期の例に一致するようである。

道東の縄文晩期には、その前半に後期の傳統を繼承した土器が続くが、後半の特に終末期には、幣舞式やそれに続く緑ヶ岡式のような北海道色の濃い土器が盛行する。これらの土器の時期には、樺太や近接の大陸にみられる中央に小孔のある貝製平玉や続縄文時代前半まで使われる靴型石匕あるいは靴型石器とも呼ばれる石製ナイフなどが伴出している。後者の石器は、樺太南部、千島列島、オホーツク沿岸北部地域、カムチャツカ、アリューシャン列島にも分布している。この石製ナイフはエスキモーが陸獣・海獣の処理に使用したナイフの祖形をなすものであろう。ここで言うのは少し唐突だが、加藤晋平氏は早くから「北海道縄文文化後期・晩期におこった社会経済的な変化・発展は、北アジアの原始社会の諸部族の変化・発展と軌を一にしているのではないか」と考えられている(加藤1975)。晩期の特定の土器の時期の「矢柄研磨器」の出現は、このような大陸の諸情勢を考える必要があろうかと思われる。

3. 「矢柄研磨器」の機能

以上、縄文時代各時期の「矢柄研磨器」を伴出土器に留意しながら紹介してきたが、次にその機能について考えてみたい。山内博士はその機能を、溝を内側に二個対にして円孔をつくり、対象物をその中通す過程で砥ぐものとされたが、矢柄研磨器説を批判する研究者は、これまで、「矢柄研磨器」が二個対で出土したことがない

表 2. 東釧路第3遺跡出土品(溝の幅の測定値)



ことを一つの論拠としてきた。しかし、前述したように、東釧路第3遺跡や幣舞遺跡の例があるのである。これらの「矢柄研磨器」はそれぞれ同一の石材で作られており、草創期の仲町遺跡例(岡本ほか1982)も考えあわせると、二個対で使うことを前提に作られたと思われる。また、今回紹介した「矢柄研磨器」の多くは、溝側の面が平らによく擦られている。東釧路第3遺跡からはPL. 6右2点、第2図15・16のような未製品も出土しており、明らかに重ね合わせるために成形されていることがわかる。もし、単独で使用するならば、溝側の面を平らにする必要はないであろうし、溝も一本だけでなく、他面にも、あるいは幾条にもあるはずである。ここで注意しなければならないのは2条の溝をもつ砥石である。1条の溝の場合とは研磨する方法が異なるのではないかと思われる。あくまで参考ではあるが、現代においても、弓矢を製作する矢師は「矢柄研磨器」と同様な道具で矢柄を研磨している(浦上1967)。第2図22のような二つの溝をもつ「石洗いの石」に硬砂と水をつけた二本の矢柄を入れて、矢柄を地面に立て、指で矢柄を回転させながら「石洗いの石」を上下に動かすのである(註7)。この場合、胡坐するのではなく、何かに腰掛けてする必要がある(註8)。これらのことを考えると2条の溝をもつものも「矢柄研磨器」に含めてもよいのではなかろうか。

道東では、東釧路遺跡第II地点の小型品から、幣舞遺跡の大型品まで「矢柄研磨器」の大きさかなりバラエティーがある。これらが同じやり方で使用されていたかどうか検討する必要があろう。それと同時に、今後も二個対で出土する例に注意を払っていくべきであろう。

4. 「矢柄研磨器」と対象物

次に研磨する対象物が何であるかについて考えていきたい。まず太さであるが、それぞれの「矢柄研磨器」の溝の直径値を計測してみた。東釧路第3遺跡では未製品などを除き、直径値が出せるものは27点ある。そのうち、表1のように、0.8cmから1.1cmの値に27点中21点が含まれる。対象物の直径は溝の直径値より小さいはずであるから、太さはほぼ1.0cm前後と考えられる。なお、0.8cmより小さいものはない。また、「矢柄研磨器」の幅に対する長さの比は、完成品を参考にすると、表2のように、おおむね1:2から1:3.6で平均は1:2.6となる。幅の計測が可能な22点中15点は5cm以上であるから、それらの長さは10cm~18cmになると思われる。対象物は当然それより長いはずである。

以上のことから、対象物は断面が丸く、直径が1.0cm前後、長さが10cm以上のものと考えられる。矢柄の製作に際し、太さなどに一定の基準があったと仮定すれば、これらの数値は研磨の対象が矢柄であったことを示していると思われる。石質が軟質な軽石であることから、骨角器のような硬い材質の小型品を専ら研磨したとは考えにくい。

5. 「有溝砥石」について

最近では、この「矢柄研磨器」を「有溝砥石」として扱う傾向がある。特に宮下健司氏は一連の論考で山内説を批判している(註9)。氏の批判には問題が残る(宮下1985)。あらゆる形態の有溝砥石を図示したところで、山内氏の定義した「矢柄研磨器」が先土器時代から弥生時代まで、また、日本列島全域に分布するとはいえないのである。少なくとも、その上限は縄文時代草創期であり、同種の遺物は先土器時代には見られない。また、二個対で用いるような形態のものと、擦痕状の砥石や、溝が幾条もある砥石とは、機能的にも同列に論じるべきではない。宮下氏の分類でも、山内氏が指摘した「矢柄研磨器」の形態は草創期や道東のいくつかの時期にまともって存在するのであるから、多様な形態をもつ有溝砥石とは分けて、別の名称を与えなければ、用語の混乱を招いてしまう(註10)。確かに、溝が先細りするもの(第2図18、19)や2条以上の溝をもつ砥石の機能については今後も検討していかなければならないが、道東の資料で見る限り、溝が先細りする例のうち、いくつかは研磨する前の「溝つけ」の工程のものと思われる。また、(第1図1)のような他の作業に転用したと思われるものも少

なからずある。いずれにせよ、二個対にして研磨するという技術の出現にもっと注意を払うべきではなかろうかと考える。

6. 縄文以後の「矢柄研磨器」について

これまで述べてきたように、北海道の「矢柄研磨器」は、釧路市東釧路第3遺跡及び幣舞遺跡の例を軸に検討したところ、二個対にして矢柄を研磨していたとみられる。だが、この石器が、縄文以降の文化にどのように継承されたかは詳かでない。細分された続縄文土器との伴出例が明確でないからである。

だが、次のオホーツク文化に、二つの遺跡からの出土例がある。その一つはオンネモト遺跡の断面長方形に近い卵形を呈する溝幅1.0cmの出土品である。報告者が、有溝軽石製品と記載し、「矢柄研磨器」と結んだ例である(前田ほか1974)。加藤晋平氏は、だいぶ前にこの資料に注目し、オホーツク文化と沿海州南部の関係に言及して、チャビゴウ河のコピト丘の墳墓の砂岩製「矢柄研磨器」とこのオンネモトの例を対比させて考えられている。もう一つの例は、羅臼町松法川北岸遺跡の出土品である。同遺跡の報告書には図示記載がないが、調査を担当された豊原照司氏の談によれば、オホーツク式土器に伴って二つ対をなし、即ち重ね合わさった状態で出土した1例があるということである。縄文時代同様、オホーツク文化期においても、同じ使用法が確認される訳である。

加藤晋平氏は、先に引用した最近の論文の中で、東シベリアを含む北東アジアの「単条有溝砥石」を整理され、アルダン流域を中心とするヤクーチア地方の新石器時代には、スイアラフ文化(6200±100~5000±100)、ベリチカ文化(5000±100~2900±100)、ウィミャフタフ文化(3900±100~3100±100)の3文化を通してみられると述べられている(加藤1980)。また、「カムチャッカ半島においても初期新石器(ウシュキ I および II 遺跡の第4層、4200±100)、後期新石器(ウシュキ I 第3層)から発見され、さらにウシュキ III(クルトウク)遺跡(2070±190、2160±290、2440±80)からも見出されている。」と述べ、特に最後の例は、年代的に言って、北海道の続縄文時代の例と対応するとも言われている。このような試みが繰り返されることにより「矢柄研磨器」の大陸との関係がより明瞭となろう。

さて、道東の「矢柄研磨器」と題して空間的な範囲を絞り、それらの出土例についても見てきたのであるが、北海道における他の出土例となると、なかなかないよう

である。道東の分布をみると、釧路・根室の太平洋沿岸、知床半島を挟んだ根室海峡沿岸の標津、羅臼とオホーツク海沿岸の斜里にまたがる地域に集中しているのが注目されよう。

時代性でみると縄文時代は早期から晩期まで一応切れ目なく続き、オホーツク文化にもみられる。しかし、各時代、文化期の細別された土器型式の編年、分布をたどると、断続的であり、分布は限定される。むしろ早期から前期へというような技術の縦の継承はないように思える。分布は特定の型式と特定の地理的範囲という具合で浮上する傾向が読みとれる。将来、この辺の事情が資料不足によるものなのか、別な要因があるのか、近隣の大陸の情勢を踏まえながら検討すべきであろう。縄文晩期から続縄文前半にみられる石製ナイフの分布なども符合させると興味は盡きないものがある。分布の偏り、特定の土器に伴うなどに力点を置いた場合、アリューシャン列島、千島列島を経由した文物の傳來は、近世アイヌの行動を考慮に入れると考えられるところである。これからの重要な検討課題である。

最後に北海道アイヌの矢柄製作とその材質が問題となろう(註11)。しかし、残念なことに「矢柄研磨器」は使用されていない。名取武光氏によれば、北海道アイヌの儀式矢である花矢の矢柄は、草本類を使う「草本矢柄」と木質類を使う「木質矢柄」とがあるという(名取1985・註12)。後者の分布域はこれまで述べてきた「矢柄研磨器」の分布域と不思議なほど一致している。さらに名取氏は、花矢の最も特徴とする肥大部をなすチロシのある矢が、北アジアのみに広い分布を示し、最も類似しているのが、アムール流域の Golde のそれであると述べ、アメリカにも分布することから、それらとの連絡も考えられると言っている。興味ある事柄である。

未筆ながら、本稿を草するに当たり、軽石の石質についてご教示いただいた岡崎由夫氏、アイヌの矢柄製作でご教示を得た藤村久和氏、また、各地の情報を教示された大沼忠春、豊原熙司、金盛典夫、佐藤訓敏、梶田光明、松田猛、西幸隆の各氏、石器の実測を手伝われた石川朗氏らに対し銘記して、厚くお礼申し上げたい。

付 記

筆者の一人である澤が、釧路市立博物館所蔵資料中に、軽石製の奇妙な石製品を見出したのは、1958年5月11日に来釧して間もない頃であったと思う。形態が蒲鉾状を呈し、板面に1条乃至2条の溝を有する石製品の存在は、きわめて印象的であった。当時の片岡

新助館長の談によれば、釧路市内出土は間違いでないが、出土地は特定できないとのことであった。これらの資料は、未製品、破損品も加わる6点であるが、よく見ると棒状と板状の2種類があった。いずれも平坦面の長軸に沿うようにして幅0.6cm前後、0.8cm前後、1.0cm前後の真つすぐな溝が付されていて、形も整っているものであった。形態的に一つの意志を汲みとれる特徴を持つことから、いずれ、どこかで採集の機会があろうかと思ったりしていたが、手持ちの道内の報告書に、その姿を見い出すことはなかった。

この年、偶然の機会から「東釧路貝塚の道路工事に伴う調査」で6点の出土に恵まれた。棒状のものばかりであったが、この手のものが、押型文尖底土器に伴出するものであるのを知った。この時の資料整理ノート中には、軽石、軽石製品と記載してあるが、概報では有溝軽石製品として扱った(澤1960)。

1960年の東釧路貝塚の調査でまた2点が出土した。その内の図示した1点が、本文でも述べたように山内先生の目にふれた例である。この調査の報告書は、1962年3月の刊行だが1年ほど遅れて印刷されている。原稿執筆段階では、釧路市幣舞遺跡、同緑ヶ岡遺跡の出土品などを通じ、縄文晩期にも出土するのが分っていた。また、釧路町天寧遺跡でも表面採集していた。これらには棒状、板状の両者があったように思う。したがって、特に珍しい石器という印象は持っていなかった。だが、記載しようとするに他に比較資料がなく、それ以上の追求は無理であった。そのため報告書では「用途は何なのか明らかでないが、骨角器製作用の砥石かと思われるが、溝が中心に1条だけ施されているのからみれば、石錘の一種と考えられないこともない」とし、「普通一般に浮きとして使用されているものよりも硬く、重い」などと憶測をめぐらしたが、結局忙しさに取り紛れ、分らず仕舞いであった。この頃、HENRY N. MICHAL の「東部シベリアの新石器時代」に、キトイ期の資料が図示されているのを知った。山内清男先生から書信による問い合わせがあったのはその頃であったと記憶している。

本文でもふれたように、道東の「矢柄研磨器」は、未報告例も入れて相当の数にのぼるのではないと思う。本来ならば、それらを整理し、各地の出土例を吟味した上で、旧大陸の諸情勢を勘案しながら論述すべきであろうが、当分時間的に余裕が生れそうもないので、大急ぎで取りまとめたしまった。各項目の執筆分担は、3、4、5が三門で、他は三門の草稿を基に、澤が大幅な加筆を行なっている。もし、誤りがあると

すれば、その責は澤にあることをお断りしておきたい。

註)

- 註1. 釧路地方での「矢柄研磨器」は、釧路市緑ヶ岡遺跡や釧路町天寧遺跡などで、比較的容易に表面採集のできた資料である。未報告例がかなりあるように思う。各地の報告書でも記載もれがあるようである。
- 註2. 岡崎由夫氏のご教示による。「輝石安山岩質軽石」は黒っぽい挟雑物が多く、多孔質で、硬く重い。「石英安山岩質軽石」は、全体に白っぽい感じがし、軟らかく軽い。
- 註3. 「屈斜路軽石流堆積物」のC¹⁴年代値は、32200±3888、29400±1800がある。また「摩周軽石流(Ma-f)」のC¹⁴年代値は、6460±130と7120±180がある
- 註4. 溝の直径は幅と深さを歯科用のモデリング材料等で精査し、その断面から測ったものである。以後、溝径または直径値と呼ぶ場合には、この測定値に基づいている。別な表現の場合は、報告書等の記載値をそのまま使用している。
- 註5. 澤の当時の資料整理ノートによる。引用文献(澤1960)等では、点数は記載していない。
- 註6. 1986年2月26日、豊原照司氏のご教示による。
- 註7. 浦上栄氏の著書(1967)からの転載。図はスケッチであり、実際の大きさは大体長さ7cm前後、幅5cm前後で自然の転石を使うらしい。硬質の火山岩や堆石岩も使われる。
- 註8. 矢師、鳥山安国氏のご教示による。
- 註9. 骨角器を研磨したとすれば、溝径はもっと小さいものがあるはずである。また、V字形や不整形の溝も多くなければならない。特定の幅、断面形に留意する必要がある。
- 註10. たとえば、紅村弘氏は「半截紡錘形砥石」(原・紅村ほか1974)、加藤晋平氏は「単条有溝砥石」といった名称を与えている。筆者らは本稿でこの遺物について述べるに当たり、学史的経緯を尊重し、「」を付し「矢柄研磨器」とし、一応他の有溝砥石と分けて検討した。
- 註11. 藤村久和氏のご教示によればアイヌの矢柄は手弓用で長さ30cm、仕掛弓で50cmぐらいであり、直径は1.0cmぐらいだと言う。普通、素材はオニガヤ、ヨシが多いと言われる。仕掛弓では、ヤナギ、イタヤ、サビタなども使われるが、特に「矢柄研磨器」を必要としない。節等の凸凹の調整は「イナウケマキリ」で十分間に合うとのことである。矢と矢柄をつなぐ骨製、木製のシャフト

や長めの鳥管骨の鏃などの研磨に使用する可能性が考えられるとも言っている(藤村氏談)。

金田一京助・杉山寿栄男氏(1942)の「アイヌ芸術」木工篇によれば、狩猟用の矢柄は竹と木があり、また樺太では木製の矢柄が多いという。

更科源蔵氏(1968)「歴史と民俗アイヌ」によれば、「矢柄は鬼萱が主であるが、釧路地方ではとど松を割ったものを用い、日高静内でものりうつぎを割ったもので作ったという」とある。

註12. 花矢については、名取武光によりまとめられている(名取1985)。それによれば北海道アイヌの花矢には、ヨシ、オニガヤ、カヤ、ヨモギなどの草本類を矢柄とする家系とヤナギ、トドマツ、サビタ(ノリウツギ)などの木質類を矢柄とする家系の二つがある。後者だけの分布は、釧路地方(浜モコト、モコト、美幌、屈斜路、紅別スワン、塘路、春採、白糠、厚岸)に限られると言う。花矢は儀式矢ではあるが、矢柄の材質の伝統は本来の狩猟用矢柄のそれを受継いでいるものだろう。

引用及び参考文献

- 岩崎隆人・宇田川 洋ほか(1966)「東釧路貝塚発掘日誌(抜萃)」釧路市立郷土博物館々報Nos.171・172・173
- 宇田川 洋・澤 四郎(1984)「釧路緑ヶ岡遺跡の墓坑(1964年度)」河野広道博士没後二十年記念論文集 北海道出版企画センター
- 浦上 栄(1974)「石洗い」手の内・離れ 一弓具の見方と扱い方― 浦上同門会
- 岡崎由夫・澤 四郎(1974)「自然・先史編」新釧路市史第1巻 釧路市
- 岡本郁栄ほか(1982)「仲町遺跡」長野県史考古資料篇 長野県史刊行会
- 小野田正樹(1976)「所謂矢柄研磨器に関する一考察」文化第39巻第3・4号 東北大学文学会
- 岩崎隆人・畑 宏明ほか(1980)「釧路市東釧路遺跡第II地点の発掘調査一昭和41年一」釧路市立郷土博物館紀要第7輯
- 加藤晋平(1975)「間宮海峡をこえて」えとのす第2号 新日本教育図書
- 加藤晋平(1979)「石刃鏃文化」世界考古学辞典上 平凡社
- 加藤晋平(1980)「北東アジアの単条有溝砥石について」日本民族文化とその周辺―考古編―新日本教育図書

- 金盛典夫・小林敬ほか（1980）「オクシベツ川遺跡」一
発掘調査報告書一 斜里町教育委員会
- 金田一京助・杉山寿栄男（1942）「アイヌ芸術」第二巻
木工篇 第一青年社
- 清野謙次（1927）「北海道東北部紀行」民族第3巻1号
- 清野謙次（1969）「釧路市附近竪穴及びチャシ跡の発掘」
日本貝塚の研究 岩波書店
- 釧路考古学研究会（1968）「昭和43年度釧路市東釧路遺
跡発掘調査概報」釧路考古学研究会連絡紙 vol. 1一
3
- 河野広道・澤 四郎ほか（1962）「東釧路一東釧路貝塚
発掘調査報告書一」釧路市教育委員会
- 澤 四郎（1958a）「南千島発見の押型文土器資料につ
いて」釧路博物館新聞No82
- 澤 四郎（1958b）「東釧路貝塚附近の道路工事に伴う
調査概要」釧路博物館新聞No83
- 澤 四郎（1960）「東釧路貝塚の道路工事に伴う調査概
報」釧路の古代文化第2集 釧路考古学研究会
- 澤 四郎（1968a）「釧路市東釧路遺跡調査概報」 釧
路市教育委員会
- 澤 四郎（1968b）「釧路地方における石刃鏃の編年的
位置一伴出土器を中心にして一」新釧路市史会報第2
巻第3号
- 永田 均（1978）「弟子屈町屈斜路コタン遺跡調査報告」
弟子屈町教育委員会
- 梶田光明（1982）「標津の竪穴Ⅴ一昭和56年度標津町内
遺跡分布調査事業報告書一」北海道標津町教育委員会
- 豊原熙司・福土廣志ほか（1980）「茅沼遺跡群Ⅱ一釧路
川中流域の遺跡一」北海道標茶町教育委員会
- 豊原熙司・福土廣志ほか（1983）「開運町遺跡一釧路川
中流域の遺跡」北海道標茶町教育委員会
- 中田幹雄・金盛典夫ほか（1977）「ウナベツ川遺跡一北
海道斜里町朱円ウナベツ川遺跡発掘調査報告書一」斜
里町教育委員会
- 名取武光（1985）「アイヌの花矢」アイヌの花矢と有翼
酒箸 六興出版
- 原 寛・紅村 弘（1974）「樫の湖遺跡一岐阜県恵那
郡坂下町樫ノ湖遺跡調査報告書一」坂下町教育委員会
- 前田 潮ほか（1974）「オンネモト遺跡」根室市教育委
員会
- 宮下健司（1978）『「矢柄研磨器」の再検討一土器出現期
の様相に関連して一』信濃III30・4
- 宮下健司（1983）「有溝砥石」縄文文化の研究第7巻一道
具と技術一 雄山閣出版
- 宮下健司（1985）「日本における研磨技術の系譜一先土
器・縄文時代の砥石と研磨技術を中心として一」論集
日本原史 論集日本原史刊行会 吉川弘文館
- 山内清男（1964a）「先史時代概説付表」日本原始美術
1 縄文式土器 講談社
- 山内清男（1964b）「画龍点睛の弁(下)物理的年代決定
との対決」成城新聞12月5日号
- 山内清男（1967a）「洞窟遺跡の年代」日本の洞窟遺跡
平凡社
- 山内清男（1967b）「縄文土器の改定年代と海進の時期
について」古代第48号別刷 早稲田大学考古学会
- 山内清男（1968）「矢柄研磨器について」日本民族と南
方文化 平凡社
- 山内清男（1969a）「縄文時代研究の現段階」日本と世
界の歴史第1巻 学習研究社
- 山内清男（1969b）「縄文草創期の諸問題」MUSEUM
第224号
- 涌坂周一・豊原熙司ほか（1984）「松法川北岸遺跡」羅
臼町文化財調査報告8 北海道目梨郡羅臼町教育委員
会

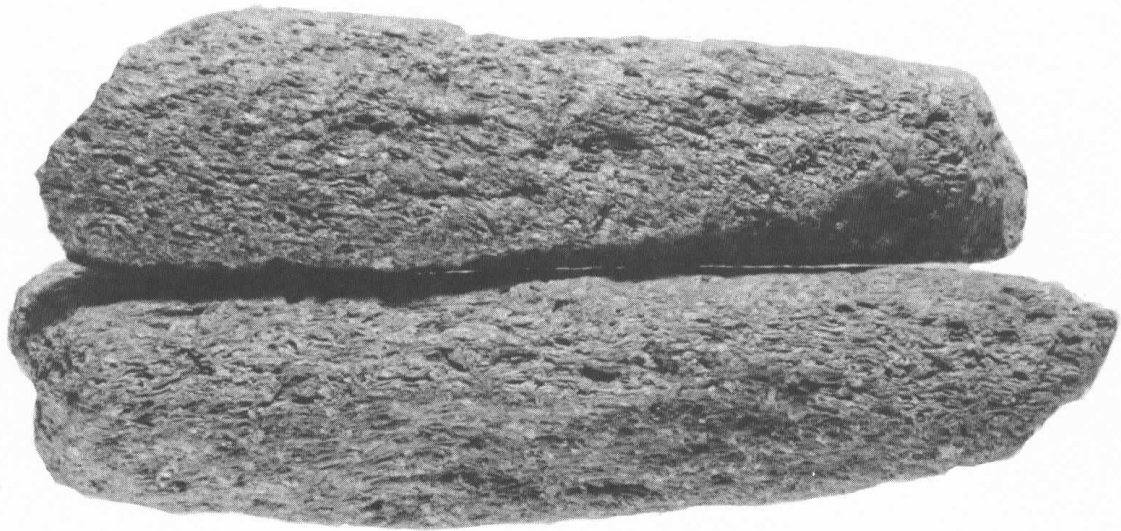


PL.1

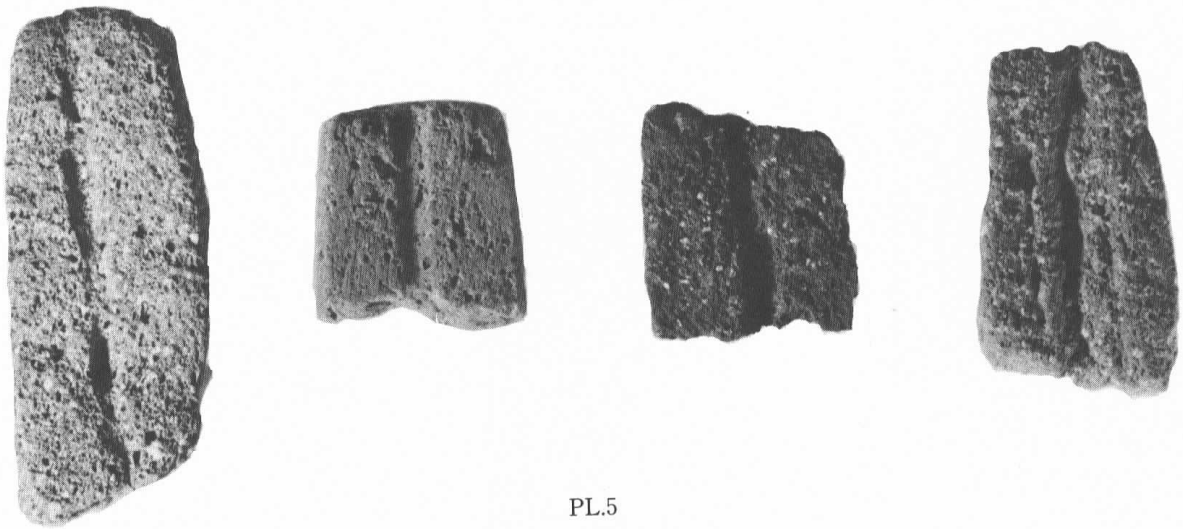
PL.3



PL.2 左側に重なって出土した「矢柄研磨器」が見える



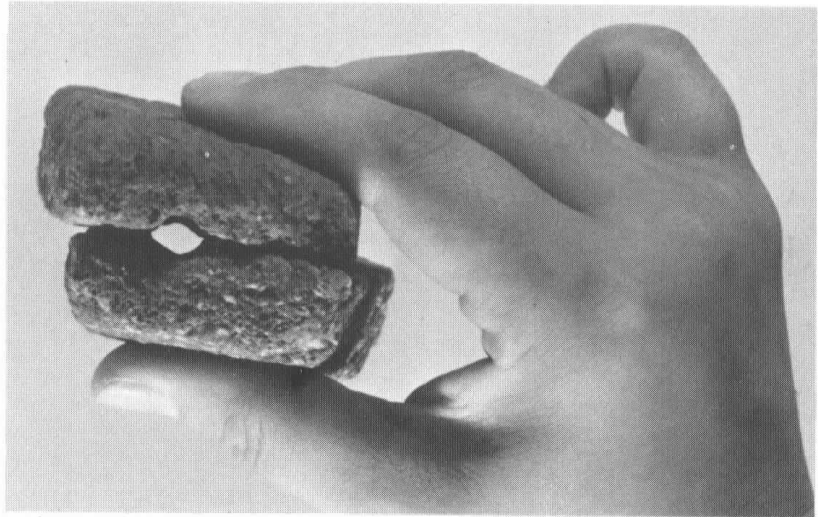
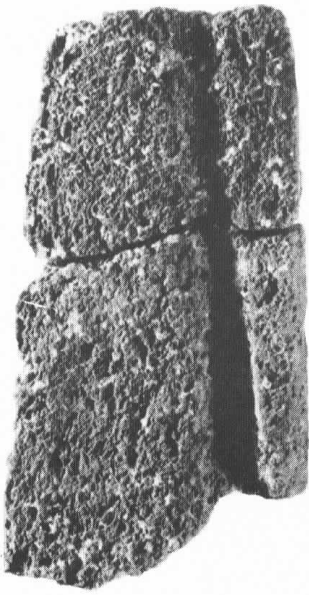
PL.4



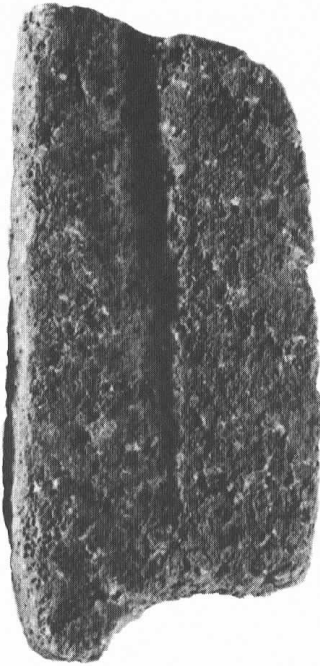
PL.5



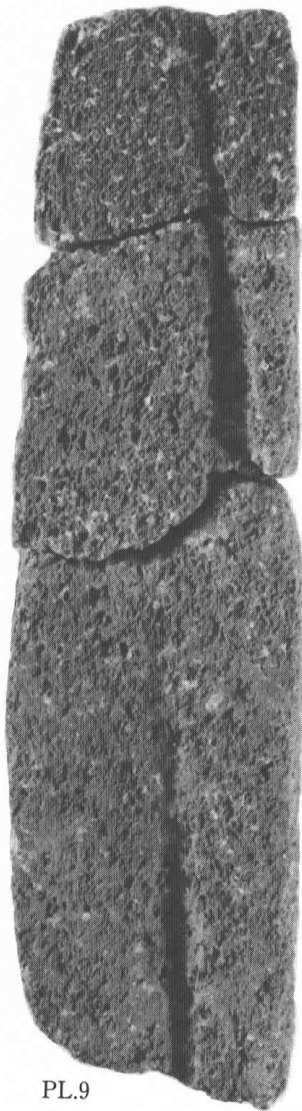
PL.6



PL.8



PL.7



PL.9

